Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

愛に満ちた三姉妹と幸運な染物師 : 一枚の風俗画(前半)

フォン・アルニム, アヒム
假谷, 祥子［訳］

(Citation)
DA,12:54-72

(Issue Date)
2018-03-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011304

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011304

愛に満ちた三姉妹と幸運な染物師
一枚の風俗画
（前半）[1]

アヒム・フォン・アルニム著　假谷祥子訳

ある美しい、しかし暑い日のことだった。社交の集いは、坂道をのぼったり平地を歩いたりでへとへとになりながら、ニーダーヴァルトの神殿で供される素敵な会食へと集結した。みなの気分は、陽気で心地よい物語を待ち望んでいた。それゆえ最初の悲しい双子の後に、この最後の陽気な双子が登場して、愛に満ちた三姉妹とジェノバの女性の話を語ったのだった。この両方の物語と同じような幸せな気分が、至る所で近付いて来んことを。

もし我々が団結して再び神殿へと登れば、
誰がライン河畔において、皆にとって愛しいものを分かつだろうか。
〔...〕
なぜなら私に一人で相対するものは、私に対して何の効力も持ちはしないのだから。
『冬の庭』、2頁。

「そうだろう、レーンヒェン。もう君は、他の女の子たちが日曜日毎に自分の宝物の人とするように僕と一緒に村へ行ったことを、気にしてなんかいないんだろ。特に今日はこんなに素敵な聖霊降臨祭の晴れの日だっていうのに。」—「あなたが私の宝物だなんて、誰があなたに言ったのかしら。」見習い職人のフリッツ・ゴルノウに、美しいレーンヒェンはひどくそっけなく答えた。「私にはもう一つ、全然違う宝物があるのよ。それがずっと頭から離れないの。」—「レーンヒェン、それは嘘だろう。」フリッツは答え、笑い、ビールのジョッキを手に取って飲んだ。「君の宝物の健康に乾杯！」

レーンヒェンも一緒に飲んだが、口の周りを拭って言った。「私には、まだもう一つ、違う宝物があるの。」そしてそのことを彼に信じさせようと続けた。「いいから、私の仕事かごの中を見てちょうだい！」

---

[1] 本稿は下記テキストの前半部の翻訳である。
Ludwig Achim von Arnim: *Isabella von Aegypten, Kaiser Karl des Fünften erste Jugendliebe. Eine Erzählung. Melück Maria Blainbille, die Hausprophetin aus Arabien. Eine Anekdote. Die drei liebreichen Schwestern und der glückliche Färber. Ein Sittengemälde. Angelika, die Genueserin, und Cosmus, der Seilspringer. Eine Novelle.* Berlin: Realschulbuchhandlung, 1812, S. 225-304.
訳出に当たっては下記の版を参照した。
Achim von Arnim: *Die drei liebreichen Schwestern und der glückliche Färber.* In: ders.: *Werke in sechs Bänden.* Bd. 3: *Sämtliche Erzählungen 1802-1817.* Hrsg. von Renate Moering. Frankfurt/M: Deutscher Klassiker Verlag, 1990, S. 778-833.

「可愛い子、愛するレーネ、—」そのかごの中を一目見てフリッツは叫んだ。「とんでもない、愛しいレーネ、君はまさかこれを盗んだんじゃあないだろうね。その金を僕に預けるんだ。もし君がそれを親方か、どこからか取ってきたんだとしたら、僕がこっそり返してきてあげるから。ああレーネ、どうやったら君は僕を愛しながら悪魔に惑わされるなんてことができたんだい。見てごらん、あの菩提樹に止まっている鳥たちが、僕が言ったことを繰り返して、僕を不安にさせる。それに僕は、草にだって耳があるんじゃないかと思うよ。」

「静かにしてちょうだい、ゴルノウ。」レーネは言い、金をしまいこんだ。「盗んだってばかり、ばかみたいに言わないでよ。私のことを何だと思ってるの。私が持っているものは全部私のものよ。天のお母様が私に贈ってくださったものなの。そして、このお金を元手に、あなたは職人に、そして親方にならなきゃいけないのよ。それから、うまくやりくりするの。だって私にはそのお金は必要ないんだもの、それはあなたのものなのよ。倹約して使ってちょうだいね。例えばこの前ひどく欲しがっていたような赤い胴着を身に着けた、馬鹿なやつにはならないでね。あなたが私の目に良く映るかどうかは、服のせいじゃないんだから。」

「レーンヒェン、こんな場合じゃなかったら、僕が君をどんなときだって信頼していることは知っているよね。君はまだ誰かを、ひどくからかったことなんてないんだもの。でも、君がどうやってそのお宝に辿り着いたのか話してくれるまで、僕はびた一文受け取るつもりはないね。これはただもう美しくてすばらしいコインで、ここら辺りでお目にかかれる代物じゃあないじゃないか！」—「ハールツ地方の貨幣よ。」とレーンヒェンは答えた。「私がハールツギローデ出身の、ハールツの人間だって知っているでしょう、そこで使えるのよ。とびきり純粋な銀でできているから、金細工師ならどこでも受け取ってくれるわ。ねえ、わかってちょうだい。このお金は全部、困ってどうしようもなくなった私に天のお母様がほほえみかけてくださったときに、お星さまから私のシャツの中に落ちてきたのよ。」

「ねえレーネ。」ゴルノウは言い、くせのない髪をした頭を振った。「君は普段はそんなに夢見がちなこともないし、一生をかけてまで嘘をつくなんてことはしたくないだろう。いいから話しておくれ、天のお母様って一体誰なんだい。」—「ああフリッツ、私だって聞きたいくらいよ。私にもそれが誰だかわからないの。堅信礼を施してもらったときに、この出来事について街の説教師様にお尋ねしたわ。でも、そうしたら説教師様は心底機嫌を損ねてしまって、私が故郷から持ってきた、そんな教皇主義の古いパン種なんか捨てておしまいなさい、って命じたの。私は何も言うことはできなかった。説教師様はとても怒っているみたいだけれど、私にとっては、この身に降りかかったことはとても愛すべきことで、ありがたいことだったから。」「あの説教師はいつもなら温和な人なのにな。」とゴルノウは言った。

「私が自分の両親について全く何も知らないってこと、確かまだあなたに言ってなかったわね。」レーネは続けた。「私は、通りすがりのハールツギローデの退官した兵士に見つ

けられた捨て子なのよ。市場に面した金の鍵亭のヒレンさんが、お慈悲の心からそれは大切に育ててくれたわ。神様がそのお慈悲に天国で報いてくださるでしょう。私にはもうそんな孝行はできないの、ヒレンさんはもう亡くなってしまったんだもの。私はヒレンさんのところで、まるで本当の子供のように生活したわ。でも、イースターの前日のことだったと思うけれど、洪水で死んでしまったの。私、とても悲しかった。残念だけど聖餐式を受けることもできなかった。もしあれが夜のことじゃなかったら、そう、きっと遺言状で、私がちゃんと生活していけるように、色々と気にかけてくれていたはずだわ。だって、ヒレンさんは、自分の弟はヒレンさんのことをちっとも気にかけていないし、ヒレンさんの方も弟には何も遺産として残すつもりはないって言ってたんだもの。弟はボーンという名前で、鉱山の採掘でお金持ちになっていたんだけど、ヒレンさんが亡くなったら、その全財産をせしめようとやって来たわ。そして三人の娘とその町へ越してきてからすぐ、不機嫌そうに私に会った。でも、私がその家にいることは許してくれたわ。ただ、私と歳の違わない彼の子ども達の世話をしなきゃいけなかった。彼らが何かをしたいときには私はメイドだったし、遊びたいときには同じ子どもだった。新しいお願いで、最初のお願いを忘れるくらい忙しかったわ。そうこうするうちに、聖霊降臨祭の日曜日がやって来たの。その日は今日のようにとても良い天気で、たくさんの子ども達が遊びに来て、私達は大体三十人くらいと一緒に青々とした草地へ出かけたわ。そこで、ボーンさんの一番上の娘、リースヒェンが提案して、ある遊びをすることにしたの。それはABCに合わせてダンスをして、加えて父方の親類の名前を挙げないといけない、という遊びだった。私に順番が回ってきたとき、父方の名前を言わなくちゃならなかったんだけど、でも一つも知らなかった。みんなが私をひどくとげとげしく見たから、私は火のように赤くなったけど、なぜみんなが私のことをそんな風に見るのかわからなかった。—それで、ついに泣き始めるしかなかった。みんなはそれに加えて、私は実の子じゃないから、本当の子ども達と一緒に遊んじゃだめなんだって言ったわ。—私にはその意味がまったくわからなかったけど、それでも魂は傷つけられた。他の子はみんなお父さんを何と呼ぶか知っているのに、私は父なしでたった一人、しかも優しいヒレンさんまで死んでしまったんですもの。私は後ろを向いて、ハンカチを目に押し当てて、道を確かめることもなく、悲しみに暮れながら森の中へと入って行った。そこでも私はまだ子供達の呼び声や笑い声がこだまするのを聞いていたわ—」

「なんてひどい奴らだ。」と染物師は彼女の話を中断し、染料で真っ黒の拳を握りしめた。「でもレーンヒェン、その話は胸にしまっておいてくれ。さもなければ、僕が親方になったときに君と結婚できないだろうからね。ここの職人たちはとても厳しいから、もし僕が—もし僕が、君が言ったみたいに、父のいない子と結婚したとしたら、僕をギルドから追放するだろう。」

「あなたが困る必要はないのよ、」レーネは言った。「私はあの時より、ずっと賢くなったから。それに、私に本当にたくさん良いことをしてくれた、あのヒレンさんの名前をいただいたの。その名前で堅信礼を施してもらったのよ。ただ、私はいつも、お仲間のヴィ

ーガントを恐れているわ。彼もハールツ出身なんだけど、私が彼を拒んだから、私のことを許せないのよ。」—「ああ、あいつは強いやつだな。」ゴルノウは言った。「あいつには勝手に張り合わせておけばいいさ。もしあいつが少しでも果し合いなんてことを口にしようものなら—」

「刀を抜く者は、刀によって死ぬのよ。」と、レーネは彼の話を遮った。「ところで私はどこまで話したかしら。そうそう、暗い森の中よ。そのとき私は絶望に浸りながら歩いていて、ほとんど道を確認することもなかったし、鳥の鳴き声も他の動物のたてる音も耳に入らなかったわ。ただただ、他の子ども達のようなお父さんが私にはいないことを嘆くだけだった。そんなふうにして半時間くらい歩いた頃に、一人の行儀の良い子どもに出会ったの。その子は私に物乞いをして、エプロンをねだったわ。私の絶望した気持ちはすっかりその子に対する同情に変わって、ヒレンさんが最後のクリスマスプレゼントとして私に贈ってくれた、青と白の縞模様のエプロンをあげたのよ。そしたらすぐにもう一人別の子どもが来て、寒いからと言って上着をねだったわ。その子には、青色の、日曜日にしか着ない上着をあげた。それから三番目の小さな子どもが来てスカートをねだったから、その子にも私の茶色のスカートをあげたのよ。そして最後に四番目の子どもが来たの。そのときにはもう辺りは暗くなっていたわ。その子はめそめそと泣きながら、シャツを持ってないんだ、と言った。私が自分のシャツも脱いで、その子に手渡そうとした、ちょうどそのときのことだった。暗闇のなかにいると近くにいる人を見つけるにも時間がかかることってあるでしょう。そんなふうに、段々、金の冠を頭に載せた美しい女性が目の前に立っているのが見えてきたの。彼女は、私のシャツの片端を掴んでいる、その裸の子どもを腕の中へと抱き上げたわ。そうしたら、私もシャツのもう片端をしっかりと掴んでいたから、このシャツは私達の間で漂白するさらし布みたいにピンと張られたわけ。私は驚いて、シャツから手を離すことができなかった。月光がモミの木の間から射して、私はその子が十字架を遍歴杖として手に持っているのを見たのよ。私はその子の輝かんばかりの姿に驚愕して、こう尋ねることしかできなかった。『あなた方は一体どなたなのですか、あなた方にもお父さんがいないのですか。』威厳のある女性は答えたわ。『私はお前の天の母です、そしてこの子は私の天の息子です！』—私は言った、『ならば私の愛すべき弟に、私のシャツを着せてください。彼はきっと凍えています。私は忠実な女中として、彼にお仕えしましょう。』—すると彼女はこう言ったのよ、『聖霊がこの子をお前に送り込むのです。なぜならこの子はお前の主、神の子なのだから。そしてお前と、お前が愛する全ての者、そしてこの子を信じる全ての者に幸せをもたらすでしょう。その印としてこの天からの祝福を受け取り、来たるべき時のために大切にとっておくのです。』—この言葉に続いて彼女の優しい白い手が星たちに合図すると、星たちは私のピンと張られたシャツの中に銀貨を落としたの。私は銀貨を慎重にシャツでくるんだわ。威厳のある女性はそれを見て微笑んでいるように見えた。私がわきに落ちた銀貨を拾い集めていると、天のお母様は子どもと一緒に、私の感謝はいらないとばかりにそっと立ち去ってしまったわ。私は驚いたまま、この宝物

をシャツで包み、その場に立ちすくんでいたの。そこから離れたくはなかった。あの威厳のある女性がもう一度来てくれはしないかしら、と思っていたわ。もしかすると三十分くらいそうして立っていたかしら。そしたらかすかな火が私の方に近づいて来た。でも私は全然怖くはなかった。野鳥も恐ろしげに鳴いていたんだけどね。ついに私は近づいて来たものが何か分かったの。それは燃えるおがくずを松明にした白髪の老人だった。彼は私を見ると、ひざまずき、泣き、キスをしたわ。始めは何も言葉にできなかった。それからお祈りをして言うには、たったいま夢の中で彼の前に姿を現した天のお母様に感謝するというの。天のお母様が予言するには、三日前に埋葬した彼のたった一人の愛しい子どもが生き返り、その子が、今度は彼が死ぬまで共に暮らすつもりでいてくれるというのよ。そんなこと私には理解できなかったわ。でも、彼が私を娘と呼んだから、私も彼をお父さんと呼んだわ。私は心の中で思ったの、彼はきっと私のお父さんに違いなくて、私の天のお母様が私に遣わしてくださったんだ、って。私がキスをすると、彼は百歩ほど離れた自分の小屋へと私を抱えて行った。そして明るい火のもとで私をじっくりとよく見て、こう言った。『ケートヒェンや、お前は墓の中でずいぶん綺麗になったねえ。これならわしも、復活の日に敬虔な人はみな、天使になったのだと信じるなあ。ところで、何を死装束に入れて持ってきたのかね。』—彼は私の小さな宝物と、それを持つ私をじっと見て、それからこう話したわ。『さあ、わしらはこれを大切に守るとしよう。わしが死んだときに、お前が宝物を持っていられるように。わしはお前に、きっとこれ以上は残してやれないだろうからね。このお金はかまどの下に埋めておこう。その間に服を着ておいで、もし疲れていたら寝ておいで。』—私は疲れていたから、きちんと片付いた小さな子ども用ベッドに横になったわ。おじいさんの藁と赤い縞模様の綿布団だけの硬い寝床の近くに、ベッドが用意されていたのよ。頭が枕に触れるやいなや、眠気でひどくくらくらしたわ。そして朝、目覚めたとき、私は自分の身に起こったはずの出来事を把握することができなかった。まるで私がいつもそうやって着替えているみたいに、ベッドの前に着替えが置いてあるのを見つけたのだけど、本当に私にぴったりだったわ。すぐにおじいさんがミルクとパンを持ってきてくれて、キスをして、私の目を見て読み取れたあらゆることを、愛を込めてしてくれたわ。だから私は、真剣な怖れを感じてこう考えたの。無慈悲なボーンさんが私を見つけ出して、また侮辱の言葉をかけながら、いいようにこき使おうと家に連れ戻したがっているんじゃないか、って。でも彼は来なかった。再会することは一度もなかったわ。その良い老人を訪ねてくる人はわずかだった。私、彼の名前を一度も聞いたことがないの。だって、私が彼の子どもではないと気づいて、私を追い出そうとするかもしれないのが怖かったから。彼はきこりで、一日に稼ぐお金はわずかだった。でも私はすぐに彼から台所仕事や庭の手入れを教えてもらったし、目に見えるような神様の祝福が私のした仕事の成果すべてを豊かに増やしてくれたから、私達に足りないものはなかったわ。それから彼は断言したのよ、私が生き返って家事をするようになった今ほど、良い生活をしたことはかつてなかった、私は家事を死後の世界で学んだに違いない、って。彼は愛と親切そのもののような人で、私

の子どもの遊びも全部一緒にやってくれたわ。ただ、私達のところを訪れる人々は、彼のことを気が狂っていると言っていた。確かに彼は、誰にも理解できないことを話すこともあったけど、子どもだって、単にそれが自分の耳の中で響く言葉だというだけの理由で、そんなことをたくさん話すでしょう。だから私は、彼は私と同じくらい賢いと思っていたわ。ヒレンさんのときと同じように、彼のところにも最期の時は突然近づいて来た。でも彼にはまだ、自分で墓の中に横たわる力が残っていたわ。彼はその墓をずっと前から、庭にある妻の墓の隣に掘っていて、その中にきれいに板を敷いていたのよ。彼はその中に横たわると、手で私に祝福を贈り、それから、もし彼の息から、私が彼の口の上に置いた柔らかい羽毛を動かす力さえも失われてしまったら、彼を土で覆うこと、私の宝物をかまどの下から掘り起こすこと、そして私の誠実な仕事ぶりでもって今やきっと日々のパンを稼ぐことができるであろう世間に出ていくこと、この三つのことをするよう私に頼んだわ。そしてそのときようやく、彼に近づいてくる天国の中で自分の娘を見たときに、『お前は私の本当の子どもではなくて、老いた日々の慰めのために贈られた天使だったのだね。』と言ったの。—そうして彼は私の手にキスをしようとしたんだけど、もはやできなかった。私は彼の冷たい唇にキスをした。彼はもう息をしていなかった。だけど私は彼の唇から離れなかったわ。きっと私は、彼が自分の魂を吐き出さなければ、彼の吐く息によって羽毛のように動かされたでしょうね。私は三日間、彼が命じたように、私のベッドの羽毛全部を使って、彼の唇から吐息が流れ出てこないかどうか試したわ。それからまず初めに、とっても小さくなってしまった敬愛する彼の体に土をかぶせて盛った。それから一番きれいな服に着替えて、かまどの下から私の宝物、百枚ものハールツギルダーを見つけ出して、下着に縫い付けたの。そして、重い心を引きずりながら、おじいさんが教えてくれた町への道を行ったわ。私は自分の出生のせいで侮辱を受けるのが嫌だったから、ハールツギローデで誰かに素性を明かすよりも、物乞いをする方を好んだ。道端で偶然、ボーンさんのところでは三人の娘たちがみんな、当時ハールツギローデで多くの人々を死に追いやった悪い熱病で死んだことを聞いたわ。私は、どこにも身寄りがないと言える良い口実を見つけた可哀想な子どもとして、さらに先へと急いだわ。みんな喜んで私に施しをしてくれて、ついに私はここ、人々が独特のドイツ語を話す海辺の町にたどり着いたのよ。初めは庭師のところに女中として雇ってもらっていたのだけど、それから私達のお金持ちの染物師、私がとても辛くて惨めな日々を送ったところに移ったの。—だけどね、いつも良いふるまいをして、キリストを信じていれば、私達二人を辛い仕事の下に引き合わせてくださった幸せの星もやって来るのよ。」

「僕には仕事はずいぶんとやりやすくなったよ。」フリッツは言った。「僕たちが一緒にオーデル川で布をすすぐときには、僕はいつも君を見ることができるからね。」—「あなたは立派な人だわ。お店で働いているときにもすぐにそのことであなたに目がいった。あなたは全てのことを完全に、完璧にするのよね。ただ、見習いを始めたのがとても遅かったことだけが残念だわ。あなたが親方になれるまでに、まだ数年かかるんですもの。」とレー

ネは答えた。—「それは自分でも悔やんでる。」フリッツはため息をついた。「いつ始めようとも同じだといいなと願っていたんだけど。それから、僕がただ黒色に染める職人であることも、申し訳ないね。今はとても綺麗で見たこともないような色が生まれていて、僕はその色で染めてみたいと心から思っているんだ。でも、僕たちの親方が得意なのは黒色に染めることだし、生地を黒色の染色釜の中で燃えないようにするのも難しいわざなんだ。黒というのは威厳のある色でもあって、あらゆる名誉ある職業に就いている人が身に付けているんだよ。でもね、僕には君がいるんだ、レーンヒェン！君は美しい染物師だよ、だって僕が君を見るところでは、僕の顔は喜びのあまり真紅に染まるんだからね！レーンヒェン、君の健康に！」

「とりあえずお金をしまってちょうだい。」レーンヒェンは言った。「ここに人が来て、そのお金を見たら、盗まれたお金だって思うかもしれないわ。」—「君は本当に良いことを言ってくれるんだね。でも、僕が君のお金を、君が僕に渡した目的以外の何物にも必要としないつもりだってことも分かっておいてくれよ。」—「私に誓ってくれる？」—「君に誓うさ、僕も信じている我々の主、キリストの名に懸けて。」—突然、レーンヒェンは声をひそめた。「ああ、見て、ヴィーガントよ。十人程見習いを連れてるわ。あいつがこのお金を見なくて良かった。まるで何か悪いことを企んでいるように見えるわ。」
そうこうするうちに、取り巻きたちと共に相当に飲んでいた邪悪なヴィーガントは、二、三人を伴い、手工業者の若者の間でよく知られている歌を叫ぶように歌いながら近づいて来た。「誰が花嫁に飲み物をやるんだ！」続いて一番後ろにいる男が、韻を踏もうと鳥の名前を叫んだ。「アトリさ、彼女に飲み物をやるのは！」—「誰が花嫁の手を握っているんだ！」—ここで体格の良い男がたった一人で叫んだ。「ヴェンド人さ、花嫁の手を握っているのは！」

このヴェンド人[2]という言葉は、当時ほぼ死刑執行人と同じような意味を持っていた。なぜなら、死刑執行人とヴェンド人だけが、全ての同業者組合から締め出されていたからである。一人の見習いがこの言葉を叫んだとき、ゴルノウは花嫁の手を離し、ぎしぎしと歯ぎしりをして、怒ってうろたえ宙を見た。美しいレーネを見て沸き上がったヴィーガントの嫉妬心は、ゴルノウのこの反応を見落とさなかった。そして、ゴルノウがヴェンド人の血を引いているに違いないという憶測が、ひどく意地悪くめらめらと彼の頭の中へ浮かんだ。そして、ゴルノウの羽織っている上着をはらい落として正体をばらせば、まるでゴルノウをレーネから金輪際引き離すことができると考えたかのように、ゴルノウに近づき、素早く胸ぐらをつかみ、木にぶつけながら早口で尋ねた。「お前、さっさと白状しろよ。俺らはもう知っているんだ。お前はヴェンド人なんだろう？」—レーネは驚愕のあまり両目を閉じた。一度も嘘をついたことのない男ゴルノウは、ひどく怯えながらヴィーガントに小さく言った。「ヴィーガント、それを二度と誰にも言うんじゃないぞ。俺の祖父はヴェンド人だったそうだ。村の人たちが俺にそう言った！」—ヴィーガントは叫んだ。「忌々しい

[2] (訳注) 12～13 世紀のドイツ人の東方植民によって次第に馴化されたスラブ系諸民族の総称。

ヴェンドの犬め、お前は俺たちのギルドを汚すつもりだな。」—「へえ、もし俺が犬だったら、じゃあ噛みつくこともできるって訳だ。」とゴルノウは叫び、ヴィーガントが彼をしっかりと捕えていたと思っていた椅子から、荒れ狂った力でもって跳び上がった。そして強靭なヴィーガントを振り回した。ヴィーガントは床に転がった。もし他の人々が彼からゴルノウを引きはがして押さえつけていなかったら、恐らくかっとなって彼を絞め殺していただろう。ヴィーガントはほとんど気を取り直すこともできないまま、ゴルノウがもう一度仕切りなおそうと申し出た時、敵をじっと睨みつけて、こう言った。「俺はお前のことなど全く恐れてはいない、けれど自分がヴェンド人だと白状したことを、お前のほうも否定はできないんじゃないか。」—「俺のほうでも、それを否定する気なんて、さらさらない。」ゴルノウは叫んだ。「たとえ俺がそのことを知らなかったとしても、俺はお前と同じような外見だし、むしろお前よりもっと良いとも思うね。悪魔だけが知っているんじゃないのかい？お前の方こそ悪魔の子なんじゃないかってことは。」

—ここで他の若者たちは、ゴルノウを押さえつけながら考えた。こいつを静かに黙らせなければならない。もしくは、こいつを潟で冷やそうか。その潟の岸辺でこの争いは起こっていたのである。そのとき、レーネが彼らの足元に歩み出て、ゴルノウを見逃してくれるように懇願した。引き換えにレーネは、ゴルノウはもう二度とシュテッティンで働かない、と誓わなければならなかった。そのように約束しなくても、彼らがシュテッティンで働き苦しむということはどうせ二度となかっただろうが、ゴルノウの命を心配したレーネは、こう約束することでヴィーガントを連れ去ることができるとわかっていたのだった。ようやくゴルノウは、この間に世界の終わりすら見た気にさせた怒りから我に返った。そして、わが身の悲惨を乗り越え生き延びようと思った。見習いのうちお人よしの若者三人がゴルノウを慰めたとき、彼はただ海を越え、デンマークか、イギリスか、オランダか、誰も自分のことを知らない国に行きたいと思った。ちょうどそのとき彼が見たのは、彼のレーンヒェンが遠くでヴィーガントの手をとり去っていくところだった。彼はレーネに不実の罪を着せはしなかったし、レーネは自分のために悪いやつらを打ち負かそうとしているのだという真実まで言い当てた。そうはいっても、この光景は彼にとってはひどく辛いものだった。それゆえ、ゴルノウは自分を生み出した大地を呪った。この大地から悲惨と侮辱という同行者を受け取ったからである。彼は地面から砂をつかみ取り、海にまき散らし、我を忘れ叫んだ。「こんなふうにお前、陸地なんて消えちまえ！」三人の見習いの若者たちがようやく彼を立ちあがらせた。しかしゴルノウは、買い求めたばかりの新鮮な食べ物の入ったいくつかのかごを持った三人の水夫が、彼のそばを通り過ぎようとして立ち止まり、「お前はばかなのか。」と尋ねるまで、依然として荒れ狂っていた。ゴルノウは彼らに、自分は主の創造した大地の上で最も不幸な人間であること、海を渡りたいが船の当てがないことを話した。「それじゃあ、」と一人が言った。「もしお前が、スヴィネミュンデでオランダ行に向けて準備している俺たちの船長と話をしたければ、喜んでそこまでボートでただで連れて行ってやるよ。」それは慰めとなる言葉だった。ゴルノウは彼らと共にボー

トに乗り込んだ。レーネに助言を求めることはもはやできなかった。スヴィネミュンデから彼はレーネに手紙を書くことにして、道中では書きたい言葉を一生懸命に考えることで気を紛らわした。ボートには帆があり、嵐というほどではないが強い風に激しく引っ張られたので、まだ暮れかけの夕方のうちにハンブルクの船の甲板に到着した。その船の船長は粗野ではあるが感じの良い男で、ゴルノウの話を聞いた後、彼をただで連れていくことに決めた。それに対してゴルノウは、船の中で、自分が役に立てる全ての仕事はもちろん、特に船の清掃と料理に熱心に取り組みましょうと申し出た。この仕事はその日の夜のうちに始めなければならなかった。翌朝になって初めて、彼はヴィーガントに木にぶつけられたときの痛みを頭に感じたので、苦労してハンモックから降りて甲板へと踏み出した。船は小刻みに揺れて彼はめまいを感じ、階段を上るにも骨が折れた。自分の周りに水と空以外には何もなく、遠くの木のこずえが緑の雲のように陸地をかろうじて示しているのを見たとき、彼はその大地を以前は呪っていたのだが、大地はレーネを抱いているので、今となっては取り戻したいと願った。ああ、と彼はただ一人静かにため息をついた。「僕の呪いは、僕にとっては現実のものとなったんだ。陸地は海の中に沈み、僕のレーンヒェンもそれと一緒に沈んでしまった。そしてもはや君は僕のことなど知らない、僕が君のことを知らない以上に。僕はまるで盗賊のように、君の愛と金を持って広い世界へ出ていく。僕は君に許しを請わなかったね。でも僕は君に約束したことを、僕の誠実な愛にかけて君に誓うよ。この金は、たとえ僕がそのために飢え死にしそうになっても、君が僕に渡してくれた目的以外のことに使われてはならないんだ。君と結婚して君を慰めることができるように、職人、それから親方になること以外には！」—この厳粛な誓いから間もなくして、彼が仕事を始めようとしたときのことだった。海が古くからの権利を陸の子ども達に行使した。遠く彼方へと洋上に出る前に、全ての者に与えられる忠実な警告が、ゴルノウにも与えられたわけである。つまるところ彼は船酔いし、数日間ハンモックから離れることができなかった。ついに彼は揺れに慣れ、船長がただで乗せてくれた渡航の恩に倦むことなく報いようと心がけた。その結果、アムステルダムでの別れのときに、船長はゴルノウにさらに40シュトゥーバーと、道中のためのたくさんの良い助言を与えてくれた。

船という泳ぐ街から、運河が横切る華奢で清潔な、描かれたのかブリキで作られたかのような世界貿易の首都にやって来たとき、私達のゴルノウの気分はどうだったであろうか。というのもアムステルダムは、たとえイギリス人たちが危険なライバルとして見なされ得たとはいっても、前世紀初頭の素晴らしく豊かな状態をいまだになお保っていたからである。そこには、香辛料の店前で赤いのどを開いて呼び込みをする色とりどりに着飾ったトルコ人から、アムステルダムで今見世物になっている様々な野生動物が模写された大きな広告に至るまで、彼を驚かせるものがたくさんあった。最後に彼は一枚の紙切れを見つけた。それは彼の母語を含む三か国語で印刷されていたので読むことができた。そこには大道商人が第一回のくじを勧めようと客寄せする調子で、とても短く次のように書かれていた。〈*40シュトゥーバーで4万グルデンを手に入れたい方は、アムステルグラフト7番地の*

金の羊亭にて宝くじを買い、その建物の前で行われる10時の公開抽選会に、本日、どうぞお越しを！〉とはいえ、40シュトゥーバーで直接4万グルデンを数時間で稼ぐことができるなどとは、つまりはこの言葉でだれかを騙すことができるかもしれないなどとは、くじ業者の誰も思ってはいなかった。この短い表現で、くじを買う気をそそることさえできれば、それでよかったのだ。しかし私達の正直者のゴルノウは、この内容を信心深く文字通りに受け取り、大きな恵みが分配されるであろう場所へ彼を導いてくださった神に感謝した。そして、自らの持つ富で多くの貧しい者を幸福にできるであろう国に神のご加護を祈り、あの船長にも同様に祈った。なぜなら船長は彼に、今や大変有利に投資できるはずの40シュトゥーバーを贈ってくれたからだ。彼は彼のレーネの宝物に手をつけてはならなかったので、船長の40シュトゥーバーがなければ彼のもとから確実に信じられる利益が去っていったかもしれなかったのである。彼はこうして祈り終えた後、泉を求める砂漠の旅行者のように、紙に書かれていた建物を探した。掲示の張り紙の向かい側に、金の子羊の像が輝いているのが見えた。そこには多くの人々が集まっており、ゴルノウも後を追ってくじが売られている部屋へと静かに入った。そこで自分の40シュトゥーバーで宝くじを買ったゴルノウは、陽気な勝者のように見えた。そして売り場の男に心から感謝したので、その男は、この奇妙なドイツ人を少なからず不思議がった。彼自身のほうこそ、普段は、くじを購入してくれた人に感謝するという習慣があったからである。一方ゴルノウは、同様にくじを買っている数人の女性が、あたかも4万グルデンが支払われるのは全員にあてはまることではないかのように、束ねて展示してある残りの紙切れから不安そうにくじを吟味して選びだしているのがなぜなのか、不思議に思った。彼女たちはおしゃべりそうに見えたので、彼は尋ねた。「ところでどなたが、貧しい者のためにこのお金全てを約束してくださったのですか。」彼女たちは彼をまじまじと見つめてからこう答えた。「カニトフェルスタン！」[3]—この言葉は本来であれば、彼女たちが彼のことを理解できない、ということを表現するにすぎないはずだった。しかし彼はこの言葉を、喜捨してくださるかの大富豪の名前だと思い、心の中で祝福し、彼の名を忘れないようにその名をひとりで何度も何度も繰り返した。彼は抽選の前にもう少し街の中を見て回り、そうして市庁舎へとやって来た。そこで近くに立っていた小売商に、この大きな建物の持ち主が誰なのか尋ねると、またしても満足のいく答えを得た。「カニトフェルスタン！」なぜならゴルノウにとって、そのような気前のよい人物が、自分の生活のためにもお金を使い、アムステルダムで一番大きな家をかまえているということは、大変好ましかったからである。かと思えば、彼は役人のような風貌をした官吏が窓のところに歩み寄るのを見た。ゴルノウは、それが誰なのか尋ねた。そして、またもや以下のような答えを得たのである。「カニトフェルスタン！」—彼は大変喜んだ。今や、心のこもった挨拶をすることで、将来の幸福の配分者に対して

[3] （原注）カニトフェルスタン（Kan nit verstan）氏という名前を幾つかの古い逸話集から思い出す読者たちは、ここで、不思議にも生じてきた実際の真実の話を読むことができてうれしく思うでしょう。良い語り手を前にすると、誰も自分自身の物語を変えずにはいられないのです。

心中で抱いていた感謝の念のうち、少なくともほんの一部を表現して肩の荷を下ろすことができたからである。

今や抽選の時であった。ゴルノウは道をきちんと覚えていて、すでに大勢が舞台の周りに集まっているのを見つけた。舞台の片側では回転式抽選器から数字が引かれ、もう片側では、もう一つの回転式抽選器から当たりくじか空くじかが引かれることになっていた。まるでファラオとの食事に招待されたか、あるいは何ペニヒにも相当する金塊をもっている子供のような表情をして、ゴルノウは不安そうに抽選の結果を待ち望んでいる群衆の間へ分け入っていった。彼は、あの人の良い船長が少し燻製された肉と乾パンを入れてくれた旅行袋をきれいに片付けて、金が入る場所があるかどうか見積もるのに始終執心だったので、左右どちらからも体をぶつけられた。抽選会は、白い服を着た数人のみなしごによって始まった。彼らは感謝の義務を負った目をして、両方の回転式抽選器のそばに立たされていた。全ての者は、まるで数字を記憶にとどめておくことができないかのように、自分のくじばかりを見ていた。そして最初のいくつかの数字が叫ばれると、あたかも最後の二つの数字に振り回されたくはないといわんばかりに、何人かは青ざめてそっぽを向いた。そしてついに空くじを示す数字が明るみに出ると、人々は悪態をつきながら帰っていった。ゴルノウはこのような短気を許すことができなかった。彼は思った。あの善良なカニトフェルスタンさんが、自分の慈善がどれほど認知されていないか、そして人々が 4 万グルデンのために一瞬たりとも待ちたくないと思っていることを知ったとすれば、いったい何と言うだろうか、と。そのため、自分への支払いをおとなしく待つことに決めた。それゆえ、彼は極めて上機嫌に旅行袋に入っていた食べ物の残りを味わいつつ、自分の番号が片側から引かれ、もう片方からこう叫ばれたときに、—「大当たり、4 万グルデン！」—、静かな愛をこめてレーネのことを考えた。みなが突然叫び声をあげた。大勢が地団太を踏み、また額を打った。あるいは他の人々は高慢ぶった。三分の一の人々は前後賞の確実な計算をした。そしてゴルノウは静かに、あたかも自分の身には特別なことなど何も起こらなかったかのように、金を受け取ろうとくじと旅行袋を頭上へ差し出した。

その光景には、責任者たちはみな笑うしかなかった。袋の中には、2 千グルデンさえ入るか入らないかくらいだったのだ。少額の当選者にはすぐに賞金が支払われたが、高額の者にはすぐに現金と交換可能な為替手形が交付された。責任者たちのうち、ドイツ語を話すことができる一人がそのことをゴルノウに伝えた。ゴルノウは自分の為替手形を大変よろこんで受け取り、カニトフェルスタンさんに礼儀正しく感謝した。彼の感謝を人々は正しく理解できなかったが、誤りであるということもできなかった。その後、彼は静かに広場を去り、どこか人々に追われることのない快適なところを探しながら、レーネに手紙を書ける機会を見つけられそうな通りの方へ行った。

ちょうどよい場所を探したが無駄だった。暗くなると空腹が自分の権利を主張し始めた。しかし、彼はレーネの宝物にはいかなる条件下でも手をつけなかったし、4 万グルデンは紙切れだったので、彼には何を買うお金もなかった。そのとき彼は大きな葬列に出くわした。

黒地に銀のブリキで装飾された棺に伴って、黒い喪章をつけた大勢の男たちが歩いていた。その後ろには、黒い布がかけられた馬車が（およそ20台）うねうねと続いていた。アムステルダムでは、くいの上に建てられた街が揺れるのを避けるために、独自の方法で馬車をつくるのだった。ゴルノウが近くを行く召使に誰が埋葬されるのか尋ねると、召使はこう答えた。—「カニトフェルスタン！」—ゴルノウは両手を空へとかかげ、口をおさえた。目からは涙が零れ落ちた。彼は言った。「ああ、あの良き旦那さまが、僕の感謝をまだ受け取ることができたなら、旦那さまの善行に対する僕の祈りに耳を傾けることができたなら。でも今日、彼が窓から外を見ていたときは、まだとても幸せそうだったじゃないか。君たちはこんなに早く彼を埋葬するべきではない、本当に死んでいるかどうかなんて、誰が分かるっていうんだ！」—召使は肩をぴくっと動かした。ゴルノウは葬列について行きながら自分に言い聞かせ続けた。「たしかにぼく達のところでも、土地の風習として、故人を死んだその日のうちに地中へ埋葬するというユダヤの慣習はある。それに、こんな金持ちの男はきっと腕の良い医者にかかっていたに違いない！」—こうした考えで彼は不安を落ち着かせ、葬列と共に教会へと向かった。そこで棺はありがたいお説教の下、先祖代々の墓へ運び込まれた。ここで彼は激しいむせび泣きをこらえることができなかった。彼の心中では、その男の—ゴルノウが思いこんでいるだけの—善行に対して、とても大きな神の至福が予告されたからである。しかし彼は、何よりもこの男がこの世の富をこれ以上全く味わえないことが悲しかった。こうして悲しんでいるゴルノウを見て、故人の息子が近付いて来た。そして最初はオランダ語で、次にドイツ語で、自宅で故人のために食事をするのでゴルノウにも来てほしいこと、父が棺に横たわってもなおゴルノウが彼のことを尊敬していることが涙から見受けられた気がした、ということを言った。ゴルノウは彼の持てる感謝全てを表現したが、それ以上のやりとりをする時間は教会の中ではなかったので、息子は誰にも惜しまれない吝嗇な父が、どのようにしてこの見知らぬ男にだけ善行を示すに至ったのか詳しく聞く機会を晩餐まで取っておかねばならなかった。

自分の持つ相当な富にも関わらず欠けていたはずの夕食に思いがけずありつけることになったとき、ゴルノウは、彼のレーネの天の母が当時全ての人々に愛の心から贈ったのだと請け負う、あの特別な祝福のことを考えた。彼は感動しながら列について行った。しかし一行が、思っていたようなカニトフェルスタンさんの城ではなく、小さな家に入っていったので、もちろん驚いた。さらにそこで彼を迎え入れたのは、予期していた悲しみではなく皆の歓声だったのである。ここで、故人の息子がグラスになみなみと注がれたワインとパイを差し出しながらゴルノウに近づいて来て、父に何を感謝しているのかを聞いた。話が 4 万グルデンのくだりになったとき、若い相続人からは理性がほとんど消えてしまった。そして、ゴルノウは金を老人から巻き上げようと妖術を使って近づいた奴に違いないから、貧乏だったこの染物師を相手に訴訟を起こそう、と真剣に考えた。染物師ゴルノウは繰り返し老人のことをカニトフェルスタンさんと呼んでいたのだが、若い相続人はこらえきれないで驚きつつこう答えた。その名前は確かに彼の苗字、つまりシュナプファンと

韻が合っているが、やはり同じ名前ではないだろう、と。韻が合っていることはすぐにゴルノウの気に入った。しかし、この男が朝相続人の父を見たときの様子を語り、話が 4 万グルデンの分配の叙述に近づくにつれ、若旦那シュナプファンは笑わずにはいられなかった。ことの顛末を説明し終わった染物師は、長い間何も付け加えようとしなかった。そのオランダ人は、オランダ人がずっと昔から申し合わせていたこと、つまりオランダ人は日々の生活においてはほとんどの他のドイツの部族よりも賢いというのは正しい、ということを改めて感じた。いまや全てのことが明らかになり、ゴルノウは自身の類まれなる幸運を確かに理解し、勤勉さでもってそれに報いることを決意した。彼はすぐに、オランダにおける黒色の染色業の状況について質問した。そしてオランダには染物師のツンフトというものはなく、誰でもやる気がある限り、春という季節が野山を染めるように染色することができるらしい、と知ったのである。すぐにゴルノウはここに腰を据えることに決めたが、ここではヴェンド人という言葉は一体何か特別な響きを感じられるものなのかどうか、さらに探りを入れた。それに対して彼は以下のような答えを得た。「オランダでは、壁は板で覆われているんだ。保温と乾燥対策に向いているからね。」ゴルノウは、他の地域ではドイツ民族にひどく嫌われているスラブの一族がここでは全く知られていないことに再びほっと一息ついた。そうはいっても、あくる日曜日の朝、ドイツの教区の説教師—ここでは司牧者としてゴルノウに紹介されたのであるが—にさらに詳しく尋ねることはやめておいた。かわりに今度は、住まいと布をしまう倉庫について尋ねた。彼はいまや自分で染色場を開業したいと思っていたのである。そして染色の材料を手に入れるために、専門の商人についても尋ねた。その商人とは、赤いのどをぱっくりと開けたトルコ人商店の看板の下で知り合った。住まいと布に関しては若旦那シュナプファンが安い値段で世話したがった。彼の父が、アムステル川沿いの快適な染色設備と布倉庫全体を遺産として彼に残していたからである。

若旦那の方でも、染物師が彼に対して抱いているのと同じくらいの喜びをこの新しい知人に対して感じていた。染物師の部屋を提供して欲しいという願いにはすぐに応えた。ゴルノウが通された部屋は、極めて美しい唐製の陶器で飾られ、ペルシャ絨毯が敷かれ、さらにアルコーブには上質な東インドの綿カバーが掛かったベッドが置いてあった。彼はここで、ベッドカバーに使われているオランダ製の上等な亜麻布を初めて知った。そして、高額のくじに当たった人はオランダでどのような夢を見るのか、そしてそれまでの生涯において貧しかった者がどのようにその夢から覚め、実際に自分の部屋で、唐風のティーカップと湯気を上げるやかん、そして朝食用に並べられている上等なクッキーを目にするのかを身を持って知った。我々の染物師ゴルノウにとっては、品物を届ける際に商人の家で運ばれていたりキッチンに用意されていたりするのをほんの時々見たことがある程度のものばかりだった。しかしながら、なにしろ彼は信心深い性質であったので、この素晴らしい調度品によって誰かが毒を盛ろうとしているなどということは考えなかった。そして、すぐにオランダ人の年寄りのように下男を呼びつけ、おいしいオランダの煙草と、それに

合わせてサイドテーブルに置いてあった非常に綺麗な白い陶製のパイプに火を所望した。下男は、火の付いたとても細い紙縒りをパイプに押さえつけ、痰壺を彼の隣に置いた。ゴルノウがやるべきことを終えたころ、若旦那シュナプファンが彼を訪ねて来たが、やがて二人とも互いに何を話せばよいか分からなくなった。そのときゴルノウは彼の神のことを思い、称賛に値する人物として紹介されたドイツ人の説教師のもとへ個人的に懺悔をしに行こうと決心した。彼は、遺産のことを考えて膝の間で両手を合わせ、親指同士をぐるぐるとやっている若旦那にこう質問することでこの長い沈黙を破った。—「あなたは全てにそうなさるのですか。」「いえ、全部の指でじゃありませんよ、でも親指でだけ下から上にも、上から下にも回すことができるんですよ！」—彼はこう答え、その際に指の動きを変えてみせたので、ゴルノウはわかりやすく言い換えてこう質問した。「あなたは全ての見知らぬ人に、私にしてくださったように大層よくおもてなしをなさるのですか。」—若旦那は答えた。「いえいえ、旦那様、あなたに対してだけですよ。でもあなたは、一目見てあなたに良くしようと思わせる何かを持っていらっしゃるんですよ。」フリッツは言った。「さあ、今こそ私は神に感謝せねばなりません。なぜならそのような恩恵にあずかれるのは、私自身の力によるものではないからです。どうかご親切に、あなたが称賛していたドイツ人の説教師のところへ連れて行ってください。そこで私は神に感謝しましょう。」—若旦那は「ええ、すぐに。」と答えると、下男を呼んで棚を鍵で開けさせ、こう言った。「今日は日曜日ですから、この服と、隣の部屋にあるかつらを着けるのが良いでしょう。どちらも新しいものですし、私達の背丈は同じくらいですから、あなたにぴったりでしょう。」—フリッツは感謝した。そして若旦那は彼が服を着るのを手伝い、下男に彼をどこに連れて行けばよいか伝えた。

下男が説教師の家で染物師の到着を伝えると、ほどなくして女中がやって来て、靴を脱ぐように言い、部屋へと案内した。その部屋のワックスで磨かれた床には、中央階段にまで続く無漂白の亜麻布が敷かれており、壁には、幅広で細かいひだの飾り襟を身に付けた、気品のある幾人もの説教師の肖像画が飾られていた。そこで女中は彼を静かに観察しつつ、自分を残して人払いさせた。すぐにとても真面目そうな、のっぽでやせこけた、そしてあたかも日曜日のご馳走を邪魔されたかのように、何となく陰険な感じの男が入って来た。そして染物師に十字を切って挨拶し、言った。「もし大きな罪があなたの心を苦しめているのなら、その罪を気にせず告白するのです。そうすれば私は神の力を借りて、どのようにすればあなたが再び魂の平安を取り戻し、厳かで邪魔されることのない聖餐の喜びに至ることができるか助言できるでしょう。」—こう言うと同時に彼は染物師と共にこの部屋を横切った。染物師は、このワックスがけされた床はいわば水面のようで、その上を通ることは固く禁じられているように思ったので、島から島へ、つまり亜麻布が敷いてあるところから次の布部分へ行くために、力を込めて跳んだり、回り道をしたりした。聖職者は、この動きを悪魔の内面の活動だと思い、悪霊の憑依に対して祈祷を始めた。悪霊は普通、ひどく後悔している魂がキリストのもとに帰ろうとするときに現れるのが常である。祈祷す

るために彼は染物師に体を近づけ、部屋の隅に押しやり、三位一体の名に懸けて己の罪を自白するよう促した。そして染物師は、ほとんど喉でつっかえていた悩み深い言葉をついに発したのである。「ああ、親愛なる説教師様、この世界で私はどのように暮らしていけばよいのでしょうか、私は生まれたときから恐らくヴェンド人なのです！」—説教師は驚いて彼を見て、口を開いた。「それがあなたの全ての懺悔なのですか。」「ええ、説教師様、これが私の唯一の罪でございます！」—そして説教師は答えたのである。「それは全く罪ではない、だが、罪ではないということこそ素晴らしいではないか！」

この答えによって、この善き染物師の胸のつかえはおりた。彼はかつて全てのツンフトからヴェンド人が一般的に除外されるのを見たときには、ひそかに、あたかも大きな原罪が彼にのしかかっているような気分になっていた。今や彼はそれが罪ではないことを聞いたのである。彼の外見の美しさに関していえば、周りからのけ者にされるほど醜いとは自分では全く思っていなかった。実際、女の子たちがしばしば美男子フリッツと呼ぶくらいであった。彼は手早く自らの不幸について、つまり自分をシュテッティンから追放した元凶、自分の素性を漏らされたこと、そしてアムステルダムでも状況が改善されないのではないかと心配していることを語った。聖職者は、たしかに自分は一人の外国人として、ヴェンド人という概念だけなら知っているけれども、アムステルダムでは外国人は、人食い人種でない限り、誰一人として仕事に障害を感じることはないのだと保証して、ゴルノウを完全に落ち着かせた。そして同時に、自分の妻と娘たちはヴェンド人という概念を全く知らないだろうから、彼をヴェンド人として彼女たちに紹介する許可を求めた。ゴルノウは言った。「もしヴェンド人であるということが自分に不利ではないならば、私は自分の出自は秘密にしておくよりも、公言したいと思います。」

説教師は、まるで武器庫のように真鍮や銅製の道具で輝いている、絵の描かれたタイル張りのキッチンを通り抜け、ゴルノウを階下の部屋へと連れて行った。そこでは、きれいな日曜日用のレース飾りをつけた帽子と、頭の前方から耳にかけてそれをしっかりと押さえている輝く金のストラップを身に付けた二人の娘がテーブルクロスや食器類を並べていて、そのわきでは太った女性が火鉢の上に座ってくつろぎ、もうひとり老女がクッションの東屋にうずくまるようにして籐椅子に深く腰掛けていた。女たちはオランダ語で話していたのだが、来客の到着を知ると、みんなゴルノウの周りに集まってきて、手には鱗がないかどうか、額には角がないかどうか、彼が同じ人間であると確かめるかのようにじっと眺めた。それから初めに娘たちが彼とドイツ語で話した。二人とも彼には好意的に見えた。特に年上で、成人したまことに美しいズザンナという娘がそうであった。咲きかけた花のように目立たないけれど美しい、少女から大人の女性になる間ぐらいの年齢である妹シャルロッテは、遠くとは言えない距離から彼をじろじろ見た。彼は自分の物語を語らねばならなかった。それを聞くと、皆は彼の幸運に驚愕した。親戚から近所の人までが呼ばれ、部屋はいっぱいになった。そしてつまるところ、ゴルノウは、極めて様々な人から次の週の予定が全て埋まるほどたくさんの招待を受けたのである。しかし毎日正午には、過去の

日々において彼のために集められたあらゆる幸運を神に感謝するために、前もって教会の説教師のもとに礼拝に行ったあと、そのまま説教師の家に滞在せねばならない、ということになっていた。さて、これは教会で染物師の同行者が盗み聞きしたか、ただの推測のどちらかだろうが、彼は食後に、歌がうまいに違いないと主張され、もしヴェンドの歌を知らないのなら、ドイツ語の歌を歌うように頼まれた。染物師は、彼のレーンヒェンのことを考えていたときに船乗りから聞いた歌以外には何も知らなかった。そしてただ、邪魔されずに彼女のことを考えるために、その曲にオランダの暗い世界の詩をつけて歌い上げた。

冷たい手を、温かい心を、
私は確かに感じていた、
近くでは涙を、遠くでは痛みを、
あの別れの時に。
最後に手を握ったとき
二人の手は凍えてひとつにかたまった。
しかし心は十分に熱く、
炎が氷を溶かして二人は離れた。

私はまだ自分の手の中にお前の手を、
そう、冷たく感じる、
そして心の熱い火が
私の心に寄り添っているのを感じる。
冷たい手を、温かい心を、
お前は私から受け取らなければならない、
誰に対しても冗談で手を握ることなかれ、
心が冷たくならないように。

彼の歌に込められた心からの叫びは、拍手喝采を引き起こした。当時のオランダでは歌などというものは特に退屈に行われていたので、人々は染物師をドイツの最高のマイスターシンガー、当時世間では大きな評判になっていた、没落しつつあったギルドのうちの一人だと思った。彼はもっと歌うよう懇願された。そこに来合わせた若旦那シュナプファンが、この滅多にいないナイチンゲールを自宅に泊めていることを誇りに思うことといったら並みのものではなかった。染物師は、知っていることなら何でも歌にして、誰もが満足した。この満足を、ドイツ人説教師の娘であるズザンナだけはひどく乱暴に表現した。彼女はゴルノウの足を踏みつけたのである。そのため彼は、彼女は自分のことを犬だと思っているに違いない、と考えた。誤解というものは、それ自体で奇妙な膨らみ方をして増大するものであるが、そのように彼は犬を連れて街から追い出され、ぶらぶら歩く職人たちについ

ての楽しい歌を思い付き、溌剌と歌い上げた。

どんな街でも俺には何て輝いて見えるのだろう
そこに自分の家は建てなかったけれど、
そこで俺は流浪の職人として、
おもしろおかしく辺りを見回したものだ。
薄手の夜の服を着た、
女の子たちが扉の中にいる、
彼女たちを明るい月が照らすから、
結構ないたずら心を感じるのさ。

（少女）
「お願いします」、そう少女の一人が俺に話しかける、
「それはあくびだなんて言わないし、
あなたは竪琴弾きなんかじゃないでしょうけれど、
私に喜びと涙について歌ってください！ー
私が覚えられるように、どうかゆっくりと、
それを最愛の人に歌いたいのです、
雷が遠くで静かに光り、
コオロギは夕べの音楽を奏でます。」

じゃあライン川のとある場所について歌ってやろう、
そこには大きな鐘がいくつかある、
季節がめぐって高貴なワインができても、
鐘はただそっけなく立っている、
しかし船乗りたちがその鐘を打つと、
鐘はワインを求めて鳴るのだ。
俺は喉の乾いた竪琴弾きだ、
俺の両足もくたくただ。

（少女）
「さあここにあなたのワインが一瓶あるわ、
それから石のベンチも、
想像してみて、ライン川のほとりに座っているんだって、
そしてその高貴なワインを飲んでいるんだって。
私の腕を掴まないで、

腕をエプロンに入れて温めるのだから
さあ歌ってよ、ここは暖かくないのだし、
時が早く流れるように。」

ライン川のほとりには一人のけちな僧院長がいた、
そいつは人々がブドウの収穫に取り掛かるとき、
彼らがブドウを食べて、
爽やかな気分になることを許したくなかった。
それゆえずる賢い男は考え出したのだ、
皆はいつも歌っていなければならないということを。
その間には誰も食べることはできないし、
桶の中で跳ねていなくちゃならない。

そんなふうに俺も戸の前で歌わなくちゃいけない、
でも、そうするよりも君にキスしたい、
ああかわいい子、君の近くにいさせておくれ、
そうすれば明日、俺は君に、
君の口から汲み取った、
ありったけの甘い魔法の歌で挨拶しよう、
今は俺の口からは愛の衝動のせいで何も出てこないんだ、
番人が時を告げているね。

（少女）
「番人は彼の詩を上手に歌うわ、
あんなに素敵にあなたは歌えないのでしょうね。
彼にはとても強い勇気があって、
お化けにだって命令できるのよ。
彼にはとても大きな角があって、
遊びで本当に私を吹き飛ばすのよ、
彼の私への愛は怒り狂っているわ、
さあ、立ち去ってちょうだい。」

俺がこの警告を聞いたそのとき、
犬の遠吠えが聞こえる、
俺にはひどく耳障りだから、
ここから急いで立ち去らねばならない。

戸のところに番人が見える、
彼は俺のかわいい子にキスをする、
それに続いて彼女は、俺はそう信じたいんだが、
彼に対して戸を閉めた。

彼が今や怒り狂い
そして俺が笑いたい気分になったとき、
彼は俺に大声でこう叫ぶ。
お前は夜に何をするんだ？－
愛は空っぽ、瓶も空っぽ、
愛も瓶もお前の上で粉々に砕かれろ！
俺はそうした、彼女は家の中で笑っている。
それから俺は逃げ出した。

ゴルノウがここで偶然自分の瓶をひっくり返したとき、彼がズザンナを実際に見つめていたにせよ、そして彼女がそのことを笑ったにせよ、それは彼の側からは全く意図したことではなかったのだが、ズザンナにとっては、染物師が彼女に好意的であることを確信させた。彼女の方は、彼に近づく機会をずっと探っていたので、彼の借り物の服の上へ机からコーヒーをざあっとこぼした。そのせいで彼が絶望しようとしまいと、ともかくズザンナは彼に接触するという至福に浸り、控えめな様子で彼を拭いた。その一方でシャルロッテは、何の理由を告げることもなく部屋から出て行った。ズザンナの喜びは、家の裏側がアムステル川に面した家を持つ彼女の父親が、この家を染色仕事に使わないかと彼に提案したときにこそ、はちきれんばかりになった。若旦那シュナプファンですら、自身の家よりもこの家の方がもっと都合が良いだろう、と保証した。ゴルノウはひどく熱中して、そこの全てを見てやろうと現地調査へ行った。その場所は素晴らしかった。彼のありったけの想像力は、全空間を染色用の釜や炉、染料の備えや物干し場で満たした。それから、事情を確かに理解した、ときちんと伝わるようにした。その日は日曜だったにも関わらず、賃貸契約はその夜のうちに結ばれた。その相手の名をゴルノウはサインの際に赤面しつつ初めて知った。彼はヒレといった。この名は愛するレーンヒェンを思い出させたので、この説教師はゴルノウにとって並外れて大切な存在となった。そして同時に、ズザンナが彼のレーンヒェンとの確かな類似を顔に映し出しているかのように思われた。そのため彼は、この恋をしている子供に心を込めて向き合い、彼女を幾度か長いこと見つめなければならなかった。そして夜になり階段を下りる際、ズザンナが彼のために行先を照らしてくれたとき、彼は手を差し出した。彼女も優しくその手を握った。しかし彼女はひそかに彼の小指を噛んだ。ゴルノウは、何もかもオランダでは特別なので、これもオランダ式の友情の表現に違いないと思った。〔後半に続く〕